kikkoman

第６３号　2021年3月

MEDICAL NEWS

https://hospital.kikkoman.co.jp

膵（すい）のう胞（ほう）について

内科　渡邊　悠人

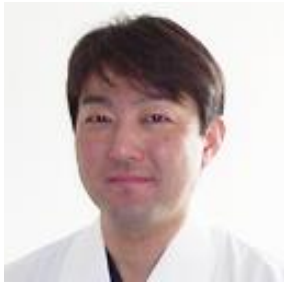
膵臓は上腹部正中（おへそより上側の真ん中）にある臓器で、胃の背中側に位置しています。お腹の臓器の中でも奥の方にあるため症状が出にくく、膵臓の病気は早期発見が難しいと言われています。特に、膵臓がんは年々増加傾向にあり、２０１９年の厚生労働省の人口動態統計によると約３万６０００人が膵臓がんで亡くなっています。部位別がん死亡数では第４位となっています（第１位　肺がん、第２位　大腸がん、第３位　胃がん）。膵臓がんは発見された時点で根治的治療（治癒を目指す治療）としての手術ができる方は約３割です。残りの約７割の方は手術ができない進行した状態で発見されており、悪性度が非常に高いがんです。

一般の方々の健康に対する意識の高まりとともに、検診や人間ドックの受診者は年々増加傾向となっています。膵臓に対しては主に腹部超音波検査や血液検査（血清アミラーゼ値）での評価が行われていますが、腹部超音波検査で膵臓がんを早期発見することは容易ではありません。一方、腹部超音波検査（腹部エコー検査）で「膵のう胞（すいのうほう）」を指摘される方がいます。日本消化器がん検診学会の全国集計によると、２０１３年の肝胆膵検診受診者のうち０．６％に膵のう胞が認められました。また、人間ドック施設では１～２％に膵のう胞が認められたとの報告もあります。

膵のう胞は膵臓の内部や周囲にできる「袋」のことで、のう胞内に水のような液体がたまっています。近年の画像検査の進歩に伴い、腹部超音波検査だけでなくＣＴ検査やＭＲＩ検査で偶然に発見されることもあります。膵のう胞の多くはＩＰＭＮ（膵管内乳頭粘液性腫瘍）と呼ばれるものです。膵臓には消化液を作る働きがあり、作られた消化液は膵管と呼ばれる管を通って消化管に分泌されます。ＩＰＭＮは膵管内あるいは膵管から分岐する分枝膵管から発生します。ＩＰＭＮは女性よりも男性にやや多く、６０歳台から７０歳台の方に多くみられます（若い方にみられることもあります）。ほとんどは良性の病変ですが、時間経過でのう胞が大きくなったり、のう胞の中に結節（ポリープのようなできもの）ができたりすることで、悪性化すなわちがん化する可能性があります。５年経過をみると、約２％ががん化したと報告されています。また、最近の研究ではＩＰＭＮとは異なる場所に膵臓がんが発生しやすいことが分かってきました。ＩＰＭＮが発見されてから５年で約３％、１０年で約８％に膵臓がんが生じたと報告されています。一般人口における膵臓がんの発生率が１年で約０．０３％であることから、約２０倍のリスクとなります。ＩＰＭＮが発見されたときに、偶然に無症状の膵臓がんが見つかることもあります。

検診や人間ドックで膵のう胞が指摘された際には、膵のう胞ががん化していないか、膵臓がんが発生していないかを精密検査でしっかり評価することが必要です。また、定期的な検査を継続することで、病変に変化がないかをチェックすることが勧められます。

院長・副院長コラム



副院長　外科
田中　潤一郎

キッコーマン総合病院外科の田中潤一郎と申します。
今回よりこのコーナーが院長コラムから院長・副院長コラムに変更となり、早速担当させていただくこととなりました。慣れない頭でひとしきりテーマを考え、やはり今は新型コロナウイルス感染症関連だなと思い至りました。

振り返りますと、一昨年12月に中国で原因不明の肺炎患者が発生して以来一年強の間に、前代未聞のことがたくさんありました。2020年1月には日本でも感染確認され、2月には横浜に寄港したダイヤモンド・プリンセス号で集団感染がありました。国内で初の死亡例もこのころでした。3月にはオリンピック・パラリンピック延期が決定し、4月には緊急事態宣言がありました。一旦感染者数が落ち着いて、7月にはGo Toトラベルキャンペーンが開始。秋、冬になって感染が再拡大。今年１月には再度緊急事態宣言が発出され、現在に至っています。

コロナ対策もたくさんありました。マスク、３密を避ける、外出自粛、飲食店の時短営業、パチンコ店の休業要請、オンライン会議、テレワーク・・・。コロナ以前では考えられないようなことばかりです。

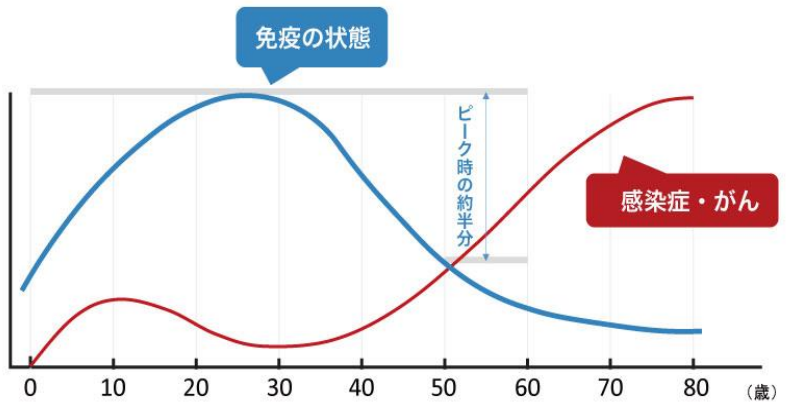
その結果、自粛警察が出現し、時短営業を守らない業者に対する罰則が検討され、マスク着用をめぐって喧嘩になったり。コロナ、オリンピック・パラリンピックの対応でも揉め事がたくさんあり、関係者が辞職に追い込まれることもありました。どれも大事な問題であるのは重々承知しておりますが、ちょっとやりすぎではと思うことも時にはあります。外出や旅行が制限され、勤務形態もオンラインに変わり、人によっては職を失ったり、収入が激減したりしている状況では無理もないことかもしれませんが、これからさらに経済が低迷してもっと厳しい状況に陥るかもしれず、本当に心配なところです。

でも、暗い話ばかりでもありません。昨年から開発されているワクチンの接種がいよいよ日本でも始まりました。開発期間が短く効果や副作用もまだ曖昧な点はあると思いますが、効果が発揮され早く元の（完全には無理でもできるだけ元に近い）状態に戻ることを期待しています。まだまだ大変な日は続きます。こんな中でも楽しめることを見つけて、せめて心の中は明るく過ごしたいと考えています。

食と健康のすすめ

新型コロナウイルスの流行で落ち着かない日々が続いています。うがい、手洗い、マスクの着用などの感染予防はもちろん、ご自分の免疫力を高く保つことも大切です。

免疫力は「20代前後をピークに、30代から下降線を辿り、50代ではそのピーク時の半分になる」



参考:「からだと免疫のしくみ」日本事業出版　Goldstein A. L., et al. "Physiology and Cell Biology of Aging." Raven Press (1979)

と言われています。
免疫力が低下すると、風邪をひきやすくなったり、アレルギーの症状が悪化したり、がんや肺炎などの生命にかかわる病気を発症する危険性も高まります。したがって、**免疫力を高めることは、健康でいることと密接な関係にあります。**

免疫力を高めるために栄養バランスの良い食事をとりましょう。

1) 魚類、肉類、卵、大豆等たんぱく質食品は、免疫物質のもととなります。
2) 抗酸化作用のある「ビタミンA」「ビタミンC」「ビタミンE」を豊富に含む緑黄色野菜は、免疫力を高め粘膜を丈夫にしてウイルスの侵入を防ぎます。
3) 発酵食品（納豆、みそ、ヨーグルト等）や食物繊維（海藻、キノコ類等）は、腸の免疫細胞を活性化させます。
4) ごはん、パン、麺類等は、活動のエネルギー源となります。

免疫力を高める基本は栄養のバランス良い食事を規則正しく食べることがとても大切です。

免疫年齢検査のご案内

２０２１年４月から新オプション検査として開始します。
少量の血液から免疫力を評価します。更に、検査結果から免疫力年齢も推定します。
あなたの免疫力は実年齢より若いですか？この機会にチェックしてみてはいかがでしょうか。

◆健診・人間ドック予約
ＴＥＬ：04-7123-5910

◆電話受付時間
月曜日～土曜日（祝日除く）の9：00～16：00

医療連携室のご案内

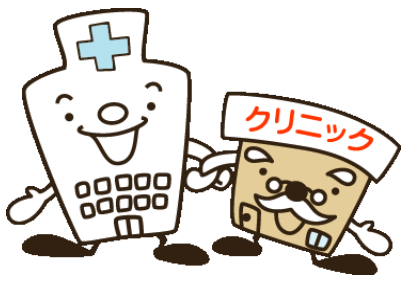
医療連携室では
【地域医療連携業務】　【入退院支援業務】　【相談支援業務】
の3つの業務を行っています

地域医療連携業務

地域医療連携業務では、病病・病診連携がスムーズかつ発展的に行われるようなサポート業務を推進しています。今後も地域医療連携の一役を担いたいと考えています。

◆主な業務

・診察予約、CT・MRIの検査予約（検査実施及び画像と読影結果の提供）
・入院、加療、手術の必要な患者さんへの対応
・その他　当院に対する診療内容問い合わせ窓口対応
・紹介状に対する紹介元医師への返事状況の確認
・連携医療機関訪問



入退院支援業務

入退院支援業務では、患者さんが安心して入院生活を送り、住み慣れた地域へスムーズに戻れるよう、退院及び転院の調整や在宅支援の調整などを行っています。入院当初から病棟と連携し、患者さんやご家族の希望を確認しながら、安心して退院・転院ができるように支援します。　院内の各専門職や地域の医療機関、在宅サービス事業所との医療・介護の連携を図っています。

◆主な業務

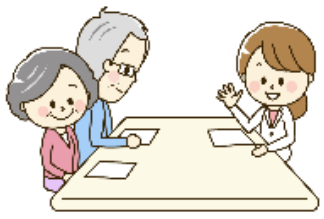
・医療・福祉相談支援
・入院支援業務
・訪問看護ステーション・ケアマネージャー(介護支援相談員)等との連携
・退院や転院などの療養場所についての相談

相談支援業務

当院では、医療や福祉、病気に関する様々な相談を専門のスタッフ（看護師、社会福祉士等）にて受け付けています。入院または通院中の患者さんやそのご家族、地域住民の方を対象に、病気・治療や療養上での悩みや不安について相談を受け、共に考えながら相談者自らで問題の解決を図れるように支援します。

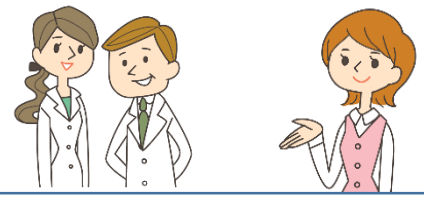
◆主な業務

・医療、福祉相談
・がん支援相談



◆相談支援内容

・がんの病態、標準的治療等がん診療及びがんの予防・早期発見に関する一般的な情報の提供
・がん以外の病気や治療に関する一般的な情報の提供
・地域の医療機関に関する情報提供
・セカンドオピニオンが可能な医療機関や手続きの紹介
・患者さんの療養上の相談(社会的・経済的な問題や精神的支援など)
・仕事や学業など社会生活に関する相談



◆相談窓口（医療連携室直通）
ＴＥＬ：04-7123-5927　ＦＡＸ：04-7123-5925

◆電話受付時間
月曜日～土曜日（祝日除く）の9：00～16：45

検査科紹介

熱がある、なんとなくだるい、どこかに痛みを感じるなど、身体の不調は誰にでもあるものです。医師はまず、患者さんの話を聞いたりしますが、これだけでは原因の特定や治療方針が決定できないことがあります。そこで医師は体から排出される尿や便、体の成分である血液を採取して検査を行います。

これが、『検体検査』、心電図や超音波など身体そのものを直接調べる『生理機能検査』と合わせて『臨床検査』と呼ばれています。その『臨床検査』を行っているのが、臨床検査技師になります。

当院の検査科は生理機能検査担当技師6名、検体検査担当技師6名、助手1名の計13名で構成されています。

『検体検査』・『生理機能検査』には、次の業務が挙げられます。

現代医療において、病気の診断の多くは、身体所見と血液など分析系の検査とCT検査や超音波検査などの画像診断から行われます。かつては医師個人の力量に負うところが大きかったですが、最近は診断・治療のチーム化が進み、医師を中心とする多職種の連携のもとに、多種のデータから病気を診断することが多くなっています。そのデータを提供するのが、私たち臨床検査技師の役目になります。

より質の高い検査や診断に有効な情報を提供できるように一丸となって頑張っていきますので、今後とも宜しくお願い致します。

主な検体検査

- ☆　一般検査（尿検査、糞便検査、喀痰検査など）
- ☆　血液検査（貧血や炎症の検査）
- ☆　輸血検査（血液型や輸血用血液が輸血可能か否かなど調べます）
- ☆　生化学検査（腎臓や肝臓などの臓器を調べます）
- ☆　免疫血清検査（感染症やホルモンや腫瘍マーカーなど）

主な生理機能検査

- ☆　心電図（動悸、脈の乱れ、胸の痛みなど心臓の病気の診断を行う検査です）
- ☆　呼吸機能検査（肺機能障害の早期発見・病気の診断に役立つ検査です）
- ☆　超音波検査
  肝臓や腎臓・心臓・その他の「身体の中の臓器」を視覚的に観察する検査です。当院では、心臓・腹部・甲状腺・頸動脈・下肢静脈エコーなど行っています
- ☆　聴力検査（難聴があるか及び難聴の程度が分かります）
- ☆　神経伝導速度検査
  手や足を刺激して、その刺激が神経を伝わる速さを調べます。手足のしびれや筋力低下などのときに検査します

発行　キッコーマン総合病院広報委員会　〒278-0005　千葉県野田市宮崎１００番地
ＴＥＬ．０４－７１２３－５９１１（代表）ＦＡＸ．０４－７１２３－５９２０